

# 1963 昭和38年

## 浮き沈みのトロウリング・クラブ

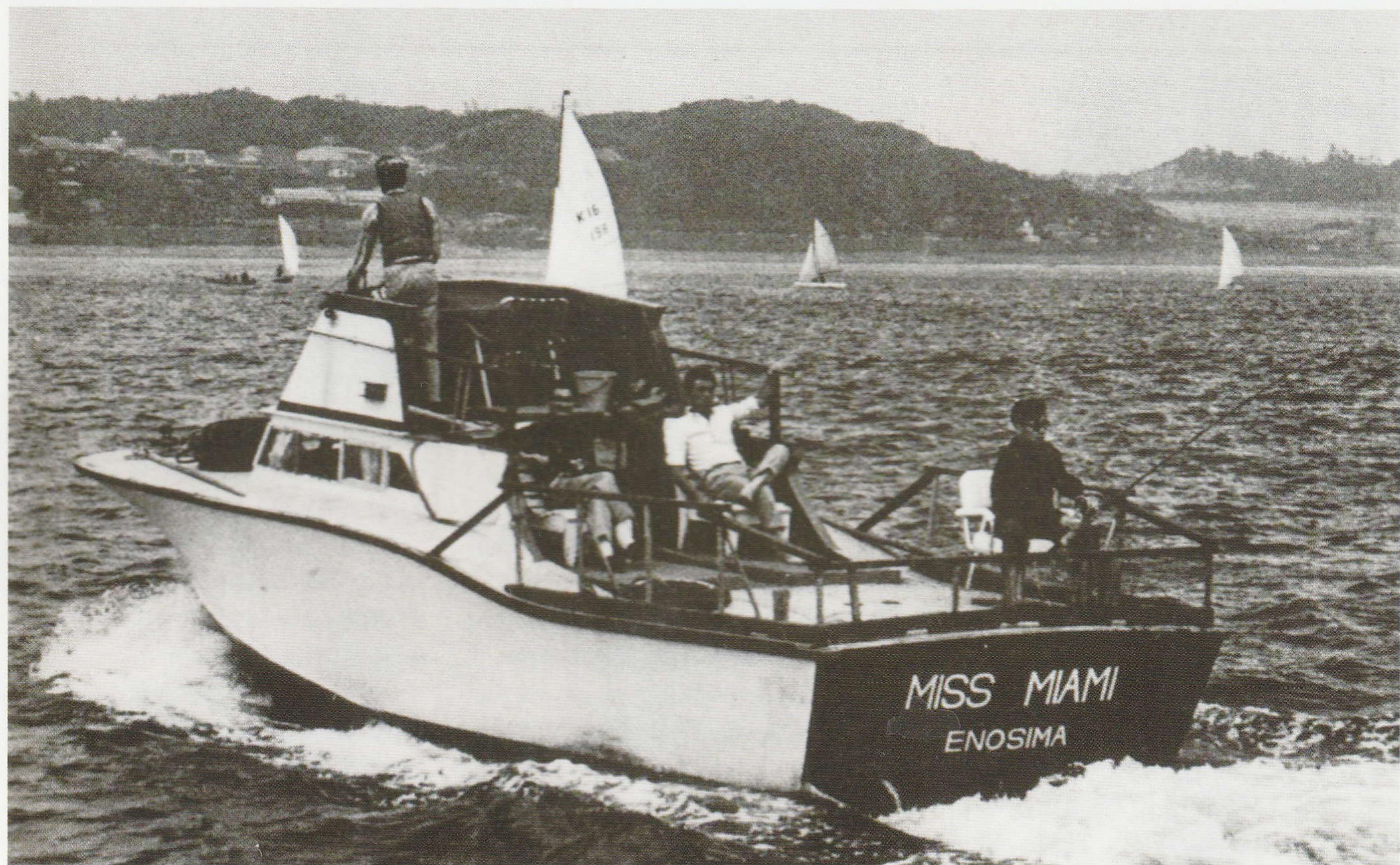
トロウリング・クラブを作りたい、と思う人は多かった。伊藤昌介氏もその一人だったが、彼の計画は成功しなかった。今どうしているかは知らない。

小菅文雄氏に出会ったのは1967（昭和42）年2月4日だった。彼は他の人と違って、漁師を職業としていた。20代からトロウリングの夢を持っていたが、10年目に33フィートのフィッシャーマン

ズ・クルーザー自分で作った。設計は専門家にしてもらい、一年かかって出来上がったのが《ミス・マイアミ号》だった。私は歯科医の浜名信也博士を彼に紹介した。浜名氏が仲間を集め、私も関口氏などをさそって、「江の島トローリング・クラブ」が出来上がった。大島に行ったこともあり、ヒラマサなどを釣ったが、ついにカジキには出合えずにしまっ

た。現在の小菅氏はどうしているか知らないが、彼のビッグ・ゲームに対する熱意は非常に強いものだった。

「江の島トローリング・クラブ」よりも一足早く、「東京オーシャン・クラブ」が誕生している。1963年11月に社長の川口保雄氏から案内状がきている。そして翌年2月7日の「デイリー・スポーツ」紙には、「スケールの大きな大物釣り」



という見出しで、今月中に進水という記事が出ているが、どうもビッグ・ゲーム・フィッシングのあり方を、知っている人とは思えない点が多くあった。新聞記事によると、社長は淡路の網元で宝幸水産に所属する漁業主で、インド洋から南太平洋でマグロ漁業に活躍していたという。家業を弟に任せてのレジャー産業への進出だった。しかし、「江の島トローリング・クラブ」が誕生したころに、このクラブ

はどうやら立ち消えになってしまった。その後の消息を聞かない。

「日本トローリング・クラブ」は、小説家林房雄氏（故人）を中心に出来たクラブで、「ラ・メール号」を作つて活躍した。林氏がトロウリングを始めたきっかけは、私が大島元町の忠兵衛丸で、タイ釣りに案内したのに端を発している。それでラ・メール号の船長には忠兵衛丸の弟が乗り込んでいた。正確な進水日、発会日は知らないが、1965年ごろから活動し始めたと思う。

「下田トローリング・クラブ」の発足は1966年で、理事長・星野直樹（発起人代表・

33フィートのクルーザー《ミス・マイアミ号》。「江の島トローリング・クラブ」がこのフェネの下に結成されたが、長くは続かなかった

東急国際ホテル社長）。発起人に木川田一隆、五島昇氏の名があるから、明らかに五島氏のクラブである。その他に私の手元に案内書があるのは「伊豆南海釣クラブ」、所在地、南伊豆十浦、伊豆南海観光株式会社、釣クラブ、荻原春樹というのがあるが、その後のことわからぬ。もうひとつは、「伊豆小笠原諸島釣クラブ」で、「内外タイムス」1973年4月27日号に記事が出ている。個人会員入会金50万円也というのは、どうかと思うし、その後のことを知らない。



カジキ釣りの夢と、東京オリンピック前後の漠とした昂揚感のなかで、幾つかのトロウリング・クラブが企画された。しかし、憧れをビジネス・チャンスに繋げようとした、その殆どが実体を伴うものではなかったが、作家の林房雄氏を中心に設立された「日本トローリング・クラブ」は比較的長く活動を継続した。同氏は、中央公論に『大東亜戦争肯定論』なる論考を連載（1963年9月号～65年6月号）したが、このことで右翼活動家の児玉誉士夫と親交を深めることとなった。「日本トローリング・クラブ」の会員名簿には児玉誉士夫の名前があった。当時、実業家として、また政治活動家にしてフィクサーとしても厳然たる力を持っていた田中清玄は林房雄とも交流があったが、「林は晩年に児玉から資金援助を受けていたんだ。マリン・クラブなんかを林はやつていましたからね。児玉を激賞しておった。林にはそういうところがあるんです」といった言葉も残されている。

「日本トローリング・クラブ」が所有していた最初の《ラ・メール号》は、前述の「東京オーシャンクラブ」が所有していた《ラ・アルカンシェル（L'ARCENCIEL）》であった。その証拠に、左上の写真ではスターの「日本トローリング・クラブ」の文字の下に「ラ・アルカンシェル」の名前が残っている。同様に右上の写真では、バウ左舷に「L' ARCENCIEL（ラ・アルカンシェル）」の船名が読める。

「東京オーシャンクラブ」の社長は、左頁の永田一條氏の原稿にもあるように、淡路の網



元で、マグロ漁業に従事していたという。《ラ・アルカンシェル》は本来、500トンクラスの遠洋母船に積載される“漁艇”で、同一のハルを使用した僚船が多く造られている。恐らく社長の川口氏は、遊んでいる漁艇を利用してマリン・クラブで活用しようと目論んだものと思われる。しかし立ち行かなくなり、林氏を中心とする「日本トローリング・クラブ」の所有艇となったのである。

写真中は、艇名を《LA MER（ラ・メール）》と改められたクラブ艇の前で写真に納まる船長の浅沼幹雄さんである。当時21歳の若き日の浅沼さんは、左頁にもあるように、大島元町でその名を馳せた名門船宿「忠兵衛丸」の4男で、林房雄、児玉誉士夫、「日本トロ



ーリング・クラブ」事務局の中島憲などが大島に釣りに来ていた縁で、請われて同クラブの所有艇《ラ・メール》の船長を任されることになった。それは東京オリンピック終了直後の11月であった。

浅沼さんは本家の忠兵衛丸に小学3年生の時から授業の無い日は手伝いで乗り子をしていたほどで、海と沖釣りを熟知していた浅沼さんが加わることで俄然、クラブは活況を呈することになった。しかし、カツオやヒラマサ、カンパチなどは手軽な対象魚ではあったものの、ロッド&リールでカジキを狙うにはまだまだ大きなハードルがあった。会員の伝手でトロウリング・タックルはハワイから取り寄せることができたが、ビルフィッシングのメソッドは暗中模索の状態であった。カジキがヒットするとエンジンのクラッチを切ってみたり、逆にアワセを入れてみたりしながら、漠然とライン強度に合わせたファイトのイメージが具体的なものとなってきたものの、当時はまだカジキを専門に狙おうという会員もいなかった。ただ、クロカジキがジャンプするさまや、ヒラマサ狙いのタックルにカジキがヒットしたりするのを度々目ににするにつれ、国内でのカジキ釣りが、次第に現実味を帯びて、浅沼さんの意識の中に大きく醸成されてきたのである。

《ラ・メール》での様々な経験は、後の浅沼さんの大きな糧となったことは確かである。



1966（昭和41）年には「日本トローリング・クラブ」の新造船が進水した。当時のニュースには、「会長の林房雄氏はカジキ釣りを大衆化するために会員外の釣り人にも平日は1人5000円で楽しめるようにした。大島、三宅島、八丈島周辺で大型のカジキマグロと一緒に打ちができる」とある。

# 1973 昭和48年



## 『分家忠兵衛丸』、カジキ狙いの乗合船を開始

「日本トローリング・クラブ」の初代クラブ艇、《ラ・メール》の船長をしていた浅沼幹雄さんが、南伊豆の弓ヶ浜に船宿『分家忠兵衛丸』をオープンし、シーズンになるとカジキを狙うトロウリングの乗合船を出し始めたのがこの年、1973(昭和48)年である。

ちなみに翌1974年の5月9日は、南伊豆町で最大震度5を観測した伊豆半島沖地

震があり、死者30名、全壊134棟の大きな被害を出したが、その前日に浅沼さんは200kgのクロカジキを釣っている。

1975(昭和50)年の『週刊つりニュース』には、「黒潮の接近でいよいよ大物を狙ってのトローリング・シーズンがやってきたが、静岡県南伊豆・弓ヶ浜の分家忠兵衛丸(船長・浅沼幹雄)が全長3.1m、130kgのクロカジキを仕留め話題

を呼んでいる。この日午前6時、釣り人4人を乗せて出船。前日もカジキの姿を見た神子元島沖でトロウリング。8~10キロ級のシイラを5尾上げた後の午前9時半頃、船長の道具に強烈なアタリが来た。道糸は120号と100号を50m追い継ぎをした丈夫一点張りのものだが、引きの強さから100キロ級と判断。ふたりが交代で40分から50分もファイト。やっと船べり近



1977年3月1日、神津島沖で記録された川上光男さん(川崎大師 裏門釣友会)のマカジキ62kg



1976年3月23日、新島沖で記録された植木和男さんのマカジキ65kg(写真上)。セネター・リールでファイトしている下の写真も植木さん

くに寄せギャフ2丁と手カギロープ1丁で寄せ、全員でフネに引き上げた。最後のトドメに脳天めがけてハンマーを5、6回打つと青みがかった魚体がみるみる真っ白に変わったのには釣り人もびっくり…』といった記事が掲載されている

『分家忠兵衛丸』の浅沼さんがカジキの乗合を開始して僅か2~3年で、“カジキ釣り”が釣りの一翼を占めてきたことが分かる。

※

日本経済が飛躍的に成長を遂げたのは、1954(昭和29)年から1973(昭和48)年までの19年間とされるが、この間には1964(昭和39)年の東京オリンピックや、1970(昭和45)年の大阪万博などによる特需もあった。また1968(昭和43)年に

掛け声と共に、好サイズのマカジキが浅沼船長の自宅の松の木に吊るされた

は国民総生産(GNP)が当時の西ドイツを抜き世界第2位となった。東海道新幹線や東名高速道路といった高速交通網も整備されていった。

戦後、焼け野原となった東京は、前述の永田一條氏の文(P.17参照)にもあるように、「当時(昭和24年頃)の有楽町には、ガード下と駅の南側にバラックの呑み屋、食い物屋、ヤミ物資屋が並んでいた時代で、サラリーマンが自家用車を持てるなんて夢にも思えない時代」であったわけだが、東西冷戦(1945~1985)を背景に、朝鮮戦争(1950~1953)やそこからは派生した特需もあって「東洋の奇跡(英語ではJapanese miracle)」と呼ばれた驚異的な復興を遂げることができた。

この時代を経て、ようやく人々の現実が、漠然とした様々な夢に、強い意志を持って手を伸ばせば届くところまで来たのである。

※

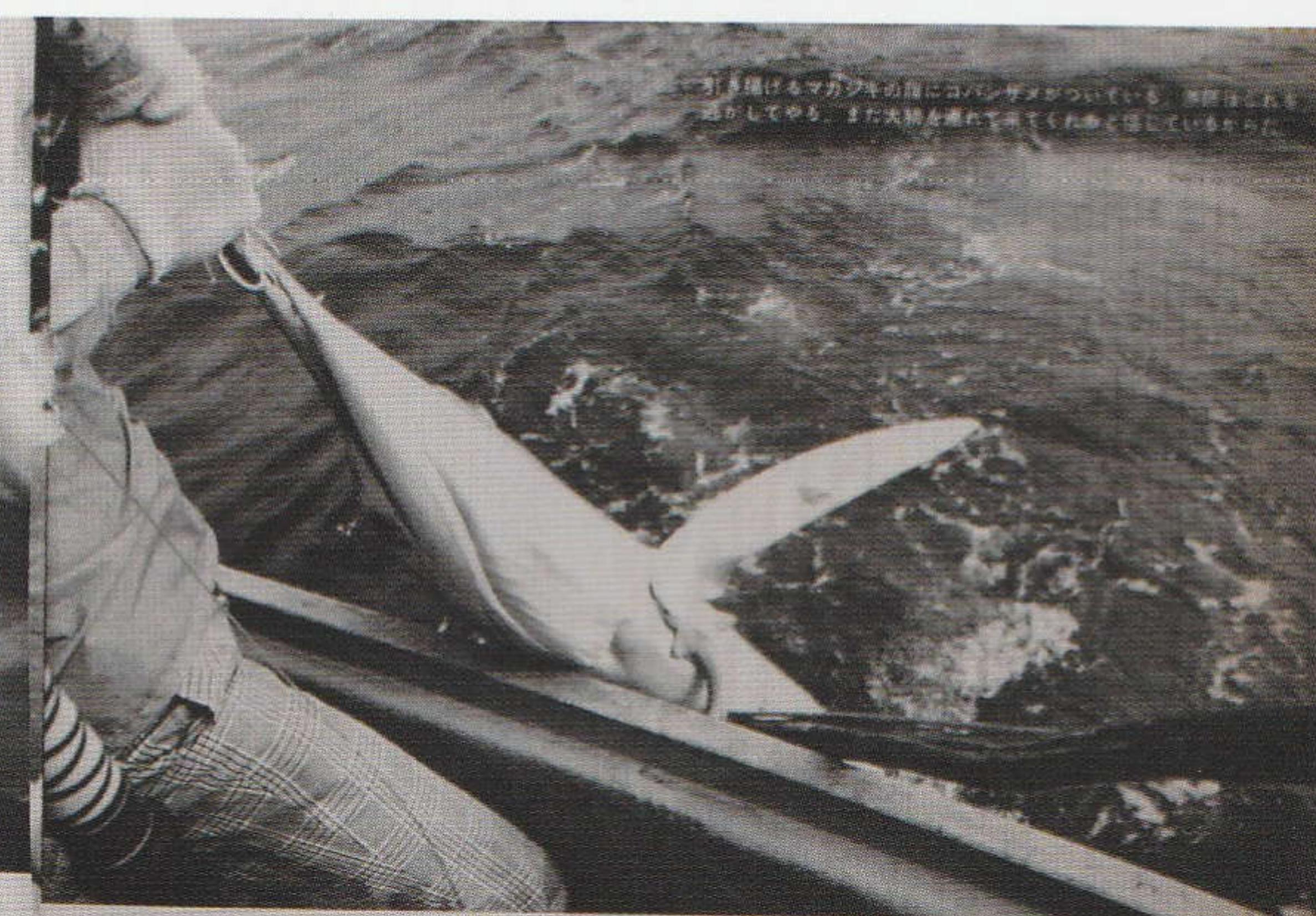
カジキ釣りの夢と、現実のギャップ。そのギャップは経済力であり、釣りのノウハウであり、国内のカジキ情報であった。

そういうカジキ釣りの世界を、国内で身近なものにしてくれたのが船宿『分家忠兵衛丸』の浅沼さんである。

多くの釣り人に、国内で



若き頃の想い出が詰まった当時の住まい跡を訪ねた浅沼幹雄さん。まさに兵どもが夢の跡…



当時の週刊誌に紹介された『忠兵衛丸』でのカジキ釣行記事。釣り人の熱気が伝わってくる

は夢物語であると思われていたカジキ釣りの世界を、何の気負いもなく、時代の流れに沿いながら、トロウリングの乗合船という形で具体化してくれたのである。この功績は非常に大きかった。

釣り客には、個性的で一匹狼的な方も多かった。いや、カジキ釣りの求道者とも言えるような真摯なチャレンジャーも多かった。

当時、東京都の港区にお住まいだった植木和男さんも『忠兵衛丸』の当初からのお客であった。客観的な資料を見る中では、国内のカジキ釣りのパイオニアと言えるだろう。巻頭（15頁）の写真も、

アングラーは当時40代前半の植木さんだ。

左頁、写真左のアングラーも植木さんだが、これは1976年3月23日の『分家忠兵衛丸』でのマカジキ65kgの記録。

この日、植木さんは午前9時に出船。南西風が強く、波立っている海を新島沖に向かった。植木さんは学生時代から釣り好きで、この年も底釣りには既に何度か出かけていたものの、トロウリングはこの年最初のチャレンジであったらしい。ロッドはガルシア、リールはペンのインターナショナル16/0に130Lbライン。イカバケの中に20号のナマリを入れてやや水面下を曳いた。正午になろうとする時、



分家忠兵衛丸には『伊豆ゴールデンフック』の本部が置かれ、メンバーが足繁く通った

新島東沖でバケを追ってくる魚影を認めた直後、ガルシアのロッドがガクンと激しい衝撃を受けた。ファイトすること約20分で仕留めたが「タックルがヘビー級なので、ちょっとカジキには申し訳ないような気分でした」と余裕のコメントを残している。

その日はもう一本同じクラスのマカジキが来たが、食いが浅くてハリ掛かりせず、風が強まってきたので午後2時に早あがりしたという。当時の『週刊サンケイ』の記者に植木さんは「今年は見込みがありますよ。魚影が濃いようなので、近くまたチャレンジします」と応えている。ようやく国内のカジキ釣りに手応えが見えてきたのである。



庭の松の木に  
多くの感動が吊るされた！



浅沼さんが『分家忠兵衛丸』でカジキ乗合を始めた頃、釣果は当時浅沼さんが住まっていた家の、庭の赤松の木に吊るされた。カジキを吊るすにはまさに絶妙の枝ぶりで、多くのアングラーがこの松の下で写真に納まった。1970年代、日本のカジキ釣りがようやく現実のものとなつた、その時である。

カジキが吊るされた記念すべき場所…。

例えば1930年の5月。ゼーン・グレイがロッド＆リールで記録した世界初の1000ポンド・オーバーのカジキが釣るされたのは、タヒチ島のバイラオ。

かつてのHIBTで毎夏、多くの歓声がこだましたハワイ島のカイルア・ピア。

自身の、記念すべきカジキが釣るされた場所は、いつも心に新しい。

今回の取材で『分家忠兵衛丸』に浅沼さんを訪ねた翌日、彼もふと懐かしくなったのだろう、かつての“その場所”に私を案内してくれた。

既に、あの絶妙な枝ぶりの松は無く、小さな静寂に包まれた庭には柔らかな光が射すだけで、まさに「兵どもが夢の跡」といった風情であった。

そこで浅沼さんの胸に去來したものは、どんな感慨であったろうか。

日本でカジキ釣りが、夢の世界から現実に大きく足を踏み入れた時代、その感動の刹那を多くの釣り人に与えてくれたのが浅沼幹雄さんである。

その数年後、やがて時代は国内で初めてのビルフィッシュトーナメントを開催するに至るが、今改めて彼の功績は大きいと思う。



多士済々の方々が、赤松の木の下で記念撮影に納まつた。この写真には「中日トローリングクラブ」の祖となる永野志農夫さんと高沢好文さんの顔も見える



「いろいろあったよ」と小さく笑う浅沼さん。「あの海でカジキを追っていた頃が、一番いい時だったかもしれないな」その顔には、そんな思いが見て取れた気がする



# 南伊豆 大物追いにカジキ

40  
50 年  
口級好狙  
い

弓ヶ浜民宿もオーフン

集中豪雨禍で交通網が寸断された伊豆半島もようやく復旧の見通しもつき、観光に海水浴に活況を見せ始めた。釣りはむしろ場辺が防げて好釣りが期待できるチャンスともいえそう。予約は早めに、交通には十分気をつけて。(引間記者)

七月十一日の豪雨禍からまだ交通網が寸断されたままの田代尾崎ヶ浦だが、西海岸回りなら現在でもOKだ。

本組協定の「田代雨れ」では依然として魚形の大きいカジキのトローリングが本命。場所は神子元島沖から石廊岬沖一帯。カジキは40~50才級が主体だが100才級も時おり姿を見せている。組長の沼野雄さんは小笠原から津軽海峡までカジキを追いかけていくほど

七部屋。釣り人のみならず弓ヶ浜の海水浴、青野川の小物釣りなど家族連れにも楽しめ特別の磯料理もできるので利用するとよい。料金は一泊二食付で2800。

▼伊豆下田駅から弓ヶ浜温泉行バス弓ヶ浜入口下車「忠兵衛丸」<sup>●</sup>五五八六二四二七三番。

1976(昭和51)年7月30日の「週刊つりニュース」の記事。「本紙協定の『忠兵衛丸』では依然として魚影の濃いカジキのトローリングが本命。場所は神子元島から石廊崎沖一帯」とある



# カジキ釣りが身近になった時代

1975（昭和50）年7月18日の「サンケイスポーツ」では、『分家忠兵衛丸』で超弩級のカジキを狙って釣行した岡田順三さん（現JGFA名誉会長）と菅崎清さんを取材している。

また翌（1976）年の7月30日の「週刊つりニュース」では『日本大物釣会』のメンバー5人のカジキ釣行も紹介されているが、翌月には『分家忠兵衛丸』念願の民宿もオープンし、その活況ぶりをうかがわせてくれる。

1965（昭和40）年から始まった深夜の

TV番組「11PM」では、翌年から司会を担当することになった大橋巨泉の「金曜イレブン」で、服部善郎さんがガイドをする『イレブン・フィッシング』が、冒頭のカジキのジャンプ・シーンとリールのクリック音で多くの釣りマニアを魅了した。同番組ワールドフィッシングのカジキ編では、パナマの「トロピック・スター・ロッジ」を拠点にブラック・マーリンを追ったり、ハワイ島コナでは当時コナ在住の橘氏の《ワイルド・オレンジ(メリット艇)》で1976年度のHIBT



国内のカジキ釣りの、いわば“突破口”を開かれた浅沼幹雄さん。多くの時間を洋上で過ごされ、いまだその心は熱い

にも参戦している。また、エクアドルのサリナス沖やメキシコのカボ・サンルーカス、カリブ海のホンジュラスなど、多くのフィッシング・リゾートを訪ね、当時のビルフィッシングの最先端を紹介してくれた貴重な番組でもあった。

1975（昭和50）年には「11PM」のフィッシング・ディレクターであった横田岳夫氏が同番組での海外釣行をまとめた「11PM ワールドフィッシング」を上梓している。

服部善郎さんは『分家忠兵衛丸』にもたびたび訪れているが、同氏が1977（昭和52）年に監修、解説をされた「決定版世界の大物釣り～BIG FISHINGへの招待（徳間書店）」は、国内ではようやく一部のマニア達によって黎明期を迎えたばかりのビッグゲーム・アングリングに大きな刺激を与えてくれた。同書で服部さんが書き下ろした「カジキに挑む SUPER FISHING入門」の項はスポーツ・フィッシングの観点からビルフィッシングの魅力と世界の趨勢を語り、IGFAルールや釣具のクラス等にまで詳しく言及された。

同書や、当時の「11フィッシング」が世界のビルフィッシング・リゾートに人々の関心を向かわせ、後にハワイやメ

キシコ、オーストラリアにまでカジキを追い求める人々が現れる遠因となったことは確かである。

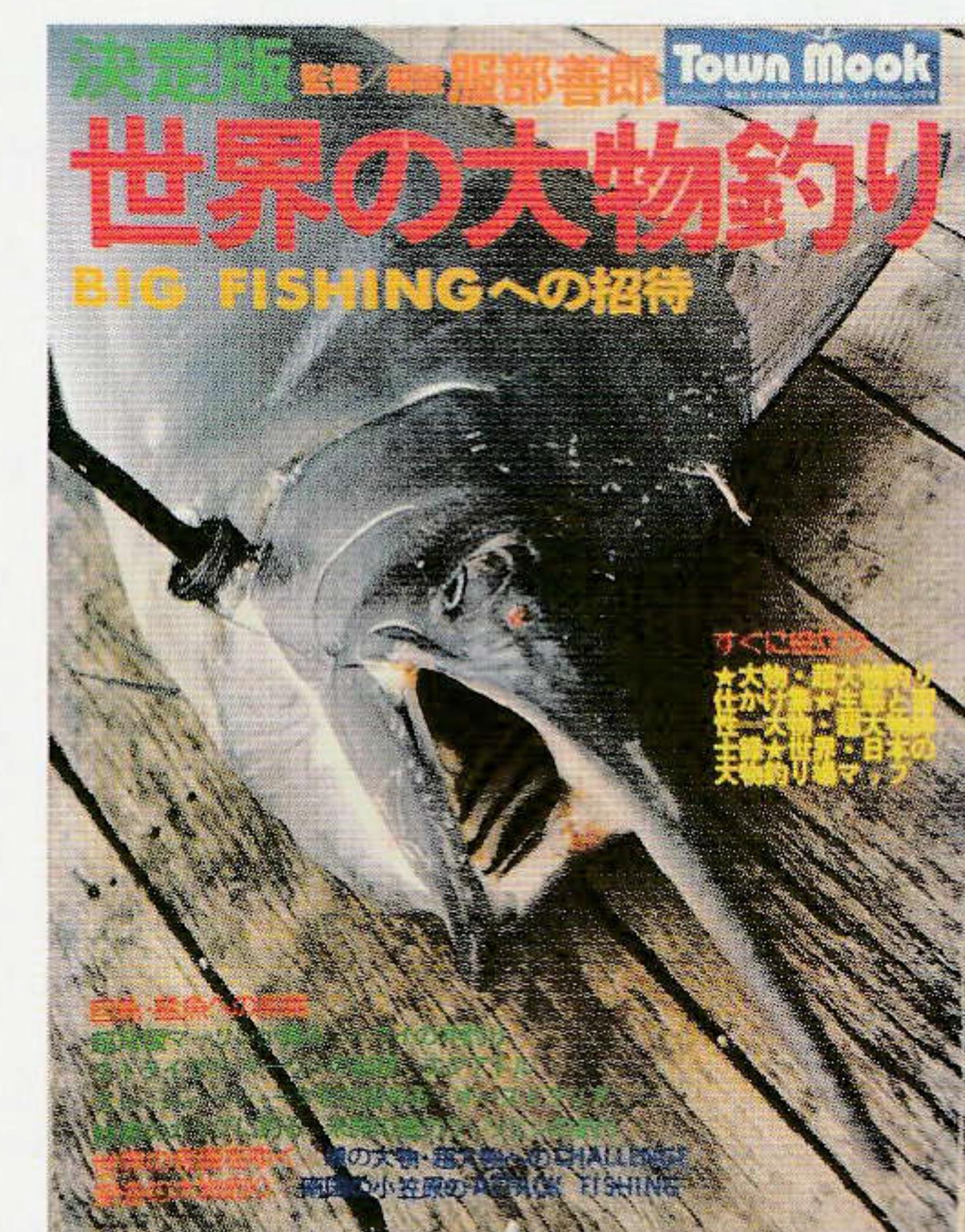
同書では伊豆諸島三宅島海域、南紀串本沖、四国足摺岬沖、薩南諸島海域、沖縄慶良間、八重山、与那国島南方海域など国内有数のカジキ漁場を紹介し、「今後、職漁家とのトラブルを避けながら、フィッシング・クルーザーやベースの普及が広まれば、日本のカジキ釣りも急速にファンの数を増すことだろう」と結んでいる。

その後、ここに紹介されたエリアのみならず、カジキの回遊コースにある各地でビルフィッシング・トーナメントが多く開催される時代を迎えることになるが、この間、マイ・ボートでカジキ釣りにチャレンジする層は増えたものの、漁船チャーターでカジキ釣りに挑む方々の割合は、さほどの伸びを示さなかった。

初期の乗合船の熱狂ぶりに大きく後押しされる形で、アングラー主体のカジキ釣りが、チャーター・ボートを活かす形で劇的に増加する兆しは見られなかった。それは、各地で開催されたトーナメントの多くがIGFAルールを採用したことにも一因があるように思える。漁船とスポーツフィッシャーのファイティング・エ

リアの構造上の差が、カジキとのファイトからランディングに至る過程で大きなハンディを露呈したわけである。そのハンディをポイントに反映させるような思慮深い大会運営側の配慮があれば、現在のようなチャーター・ボートでのエントリーが極めて少ない状況は、ある程度回避できたかもしれない。

カジキ釣りの暗中模索の時代から、大型クルーザーが跋扈するようになった現在の状況までをつぶさに見てこられた浅沼さんにとって、『忠兵衛丸』で熱狂したあの頃のカジキ釣りから今に至る時代は感慨深いものだろう。



1977（昭和52）年に服部善郎氏が監修された『世界の大物釣り～BIG FISHINGへの招待』